

Clinical analysis of sarcopenia prevalence and its influencing factors in patients with Parkinson's disease

Remi Morimoto, Kazuo Kitagawa, Kenichi Todo, Mutsumi Iijima

Frontiers in Aging Neuroscience.2025 DOI 10.3389/fnagi.2025.1718723

【背景】パーキンソン病(PD)はサルコペニアのリスクが高いとされている。本研究ではPD患者におけるサルコペニアの有病率とその関連因子について検討した。

【方法】Hoehn & Yahr 重症度(HY)がIIIまでの歩行可能なPD患者を対象とし、年齢、性別、罹病期間、レボドバ換算量、認知機能障害(MMSE、MoCA-J)、嚥下障害質問票、転倒歴、MDS-UPDRS I-IV、QOL(PDQ-8)、生物学的指標(総蛋白、アルブミン、貧血)を評価した。サルコペニアは握力、5回椅子立ち上がりテスト、骨格筋量に基づき診断した。

【結果】PD 97例(男性55例)で、平均年齢69.8歳、平均罹病期間7.3年、サルコペニアの合併頻度は33.0%であった。サルコペニア群と非サルコペニア群間で、年齢、性別(女性)、嚥下障害、MDS-UPDRS Part III 総得点、Part III 下位項目の「椅子からの立ち上がり」「姿勢の安定性」「動作緩慢」に有意差を認めた($p < 0.05$)。一方、PDQ-8はサルコペニアの有無で有意差を認めなかった。本研究でサルコペニアに最も寄与する要因は女性、認知機能障害、嚥下障害であった。

【結論】HY IIIまでのPD患者において33.0%にサルコペニアを認めた。女性、認知機能障害及び嚥下障害を有する患者ではサルコペニアに留意し、運動指導することが重要である。

